

森本佳樹教授のご退職にあたって

—その人と業績の紹介—

浅井 春夫

ASAI, Haruo

2015年度をもって、森本佳樹教授がご退職されることとなりました。以前からわかっていたことですが、その日が目前に迫ってきました。18年間、学部運営をともにし、さまざまな議論をし、ときには激論を交わした仲間との別れには特別の感情が湧くものです。

森本教授は、1979年3月に京都大学法学部を卒業され、その後、日本社会事業大学 社会福祉学部、東洋大学 社会学研究科 社会福祉学専攻 博士前期および後期課程を修了されています。その間、1981年から94年まで社会福祉協議会の職員として勤務され、社協マンの礎を築かれてきました。

森本教授は、コミュニティ福祉学部が創設された1998年10月から着任され、今日に至っています。前任校である熊本学園大学の都合で着任が半年遅れたのでした。半年遅れて着任された森本教授は多弁ではありませんでしたが、今日まで必要なことは自らの意見を貫く存在感のある人であり続けました。

森本教授の人と学部への貢献について、あげればきりがありませんが、いくつかを紹介させていただきます。

研究テーマに関して、専門は、地域福祉、コミュニティワーク、福祉情報、福祉計画、地域ケアシステムなどがあげられます。とりわけ、①要介護高齢者を中心とした地域ケア、②社会福祉協議会や小地域福祉活動の実践、③地域福祉の基盤としての福祉情報、④地域福祉計画等の策定・推進方策、⑤自治体や生活圏域レベルでの福祉マネジメント、⑥災害からの福祉的復興支援方策などを、連携・組織化・ネットワーク化・システム化などメゾ領域からのアプローチを通して研究されています。ぜひ集大成としての森本地域福祉論を単著として完成されることを多くの人が願っているところですが、それは森本教授の社会的責任でもあり、後進にとって研究の旗印となるものであるといえます。

学内においては、「3.11」後の4月13日に「コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト」を立ち上げ、委員長として名実ともに牽引車の役割を果たしてこられました。まさにひとつの学部で約5年間に、7つの活動拠点を創り、2016年2月末現在230回の訪問活動に2,856人（内訳：学生2,243人、卒業生6人、スタッフ394人、教員213人）が活動に参加しており、プロジェクトのメールのやり取りは、5,500件を超えていることにも活動の広がりを確認できます。

福祉学科の実習教育では一貫して地域福祉・公的扶助領域の中心メンバーとしてご尽力をいた

できました。実習教育では地域福祉の「新しい実習スタイル」を創りだしてこられたことをあげておきます。森本教授の要約に即して紹介すれば、その内容は、①何らかの支援が必要な人（＝サービスの利用者）の普段の生活（＝馴染みの地域社会での生活）に着目する。それが「地域福祉」であるということを理解してもらう。②そのため、例えば複数のサービスを利用している人に対して、それぞれのサービスが提供されている場で実習を行う。支援を受けながら地域で生活するというのは、どういうことなのかを体感できる。③このことを通じて、複数のサービスを調整しながら提供する体制ができてきている意味、つまり、組織機関の間のネットワークの必要性について、現実の事例をもとに理解してもらう。④こうした実習は、規模の大きな自治体や社協（つまり、都市部）では難しい。しかし、規模の小さな自治体の場合は、行政（包括）、社協、社会福祉法人の連携がとりやすい。⑤このように、マクロの連携（組織間連携）とミクロの連携（サービスの連携）を理解するとともに、それを調整するメゾの役割（包括や社協）も理解できることで、地域福祉を立体的重層的に捉えることができる。こうした点で、他大学で行われている「地域型実習」とはちがう「新しい実習スタイル」を創りだされたのです。このような地域福祉領域における実習スタイルを継続し発展させていくことは私たちの課題であり、“実践的な遺産”と受け止めています。

ゼミ・大学院生の指導に関して、具体的な数字をあげておきますと、担当をされた卒業論文提出者113名+事後提出者3名（このように締め切りを過ぎても諦めずに指導をして、完成をさせている）、修士論文主査26名、博士論文主査10名を指導されています。

在職中の役職は、博士課程専攻主任（2008年～2012年）、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト委員長（2011年4月～2016年3月）などを歴任されてこられました。

こうした実践的な教育の推進と実績の数字、担われてきた役職をみても森本教授は教育実践の人でもありました。

個人的な感慨を書かせていただきます。あるとき、森本教授が責任者として会議を準備する際に、早めに会場に来られて机といすを並べられておられたので、「こういうことは私たちがやりますよ」というと、「社協マンですから」という一言が返ってきました。いつまでも謙虚であり続ける人間であることを、研究者は問われ続ける存在であることを学び直したことを印象深く覚えています。

また、ある日の教授会での席上、学生の状況に関する意見交換で、「いまの若い人には怒りがない」という発言をされたことがありました。隣席にいた私はやや意外な感じを受けましたが、森本教授の人間の原動力を見た思いがしました。その発言は、学生たちにだけではなく、私たち後進の研究者に向けられた熱き発言であったのではないのでしょうか。

森本教授の人と業績から学ぶことは、“真摯であれ、そして熱くあれ”です。

本学・本学部への多大なるご貢献に心より感謝するとともに、今後のご活躍とご健康を祈っております。